

### 3 - 18 伊豆・東海地域の最近の地殻活動の一解釈

#### An Interpretation of the recent tectonic activity in the Izu-Tokai District.

東京大学地震研究所 茂木清夫

Earthquake Research Institute, University of Tokyo.

御前崎の沈下が最近加速されていることが国土地理院の水準測量・験潮観測の結果判明した。御前崎を含む東海地域は次の大地震の起こる可能性のある地域と考えられているので、この最近の変化が何を意味するものであるかが注目されるが、その一つの解釈について述べる。

この沈下の加速は1974年頃起こっているが、駿河トラフをはさんだ伊豆半島南端で、1974年にM6.9の伊豆半島沖地震が発生していることが注目される。この地震は右ずれ断層で南側が北西に変位しているので御前崎では圧縮、沈下が期待される。また清水ではこのような沈下が期待されないが、実際の験潮の結果でも単調な沈下が進行しているだけである。従って御前崎の最近の沈下の加速を1974年の伊豆半島沖地震による効果とする考えがもっともらしいが、さらに御前崎の沈下の量の大きさを説明するには単に一様な地殻内での伊豆半島沖地震断層の変位を考えるだけでは不十分で、この断層を含む活構造線の存在が推定される。この1974年の地震断層を北西方向に延長した線が活構造線ではないかということを示す次のような事実を指摘できる。(1)この活構造線の方向はフィリピン海プレートの運動方向であり、この構造線は伊豆半島地塊の南端を限る所にある。(2)駿河トラフの海底地形がこの線を境に北と南で様相を一変しており、南側でSubductionが活発である特徴を示している。(3)中小地震及び微小地震がこの線上(特に駿河湾西側)で線上に配列している。

この構造線の存在を含むこの地域のテクトニクスは(今後さらに確かめられるべきであるが)、大地震の長期的予測をする上に重要な手掛りとなると思われる。例えば、大地震の再来周期は駿河湾北部と南部とで違い、南部では短いので、次の大地震は南の部分で起こる可能性が高い、などである。詳しくは次の資料を参照されたい。

#### 参 考 文 献

- 1) 茂木清夫：地震予知連絡会東海部会資料，昭和52年，45 - 51.
- 2) 茂木清夫：地震研究所彙報，第52号，第2冊(印刷中)